パネルディスカッション

職人文化の継承

司会：田村善次郎
パネラー：新津晃一、真島俊一、南真木人、香月洋一郎

田村：シンポジウムの午後の部はパネルディスカッション「職人文化の継承」ということで、新津先生、真島先生、南先生、香月先生の4方から、それぞれ簡単に御報告いただいてから討論していただきます。午前中ネパールを中心とした職人文化、主として金属職人文化について私共がやってきました調査の報告をさせていただきました。この研究会は「職人文化と近代化」などという大変な名前をつけていますから、本来ならば「職人文化と近代化」というようなパネルディスカッションの題にするのがふさわしいのですが、とてもそんな恐ろしいことはできないということで、「職人文化の継承」なんて日和った題にしております。その点を御了承いただきまして、あまりいじめないようにしていただきたい。

「職人文化の継承」といいましても伝統的な職人の文化、あるいは職人の技術がそのまま継承されていくというようなことは、歴史的に見ましても、別に近代であろうが現代であろうが、あるわけもないのでありまして、それなりに継承する部分と変質・変容していく部分とが当然あろうかと思います。そこらのところの問題を特に、できましたら近代化とも絡めて、皆さん方の普段の御研究の成果をここでお話いただければと思っております。新津先生、真島先生、南先生、香月先生という順序で、最初に問題提起をお話しいただきたいと思います。

新津先生はもう皆さん御存じだとも思いますが、ICU国際関係学科の教授でアジア文化研究所の所員で、開発社会学が御専門だとうかがっております。ネパールについてもかなり長く勉強なさっておられますけれども、タイ等の東南アジアでも関連の問題についてずっと研究しておられますから、近代化と絡めて問題を提起していただけるかと思っております。

それから真島先生は、TEM研究所というところの所長をなさっておられます。TはたぶんtechnologyとかtoolといったようなことのTで、それからEはecologyのEだろうと思います。Mはmanかmoneyか、あまり金には関係無さそうですが、まあ人と物と環境というようなテーマで、ずっと長い間いろんなことをなさっています。日本各地の伝統的集落の復元・開発に関連した仕事をなさっておられ、現在は佐渡の小木という港で、江戸時代に活躍した千石船、北前船の復元のマネージメントをしておられます。

南先生は大阪の国立民族博物館の第3研究部の方で、特にネパールのマガールという民族を中心に研究を進めておられますけれども、職人文化にも大変関心を持っておられて、私共の研

究会の仲間です。

香月先生は、午前中にネパールの鍛冶屋についてお話いただきました香月節子さんの御主人でして、現在神奈川大学と日本常民文化研究所の教授です。日本の鍛冶屋その他の職人の研究という地道な研究を、御夫人と一緒にずっとやってこられました。その他民族学的な視点から、日本だけではなくて韓国、ネパール――まあネパールはちらっと覗いた程度ですが――かなり広い範囲でフィールドワークなさっておられます。そういう視点から問題提起がいただけるんではないかと期待しております。

前置きはそのくらいに致しまして、さっそく新津先生から最初に5分程度、ひとわたりお話いただきたいと思います。

新津：私がネパールを対象とする研究を行うようになったのは1980年のことです。ちょうどその時ILOから、ネパールの近代化と資本財産業の研究についての依頼を貰いました。資本財産業とはどのような産業かといいますと、道具や機械をつくる産業です。こういう産業がどの程度の発展段階にあり、今後どの程度発展する可能性を秘めているかということが、途上国の産業発展の非常に重要な参考となります。したがって、資本財産業部門への援助や投資を行なうことによって、産業や社会全体の発展の基盤を形成することができるという考えがあります。

いずれにしてもネパールに行って、フィールド・スタディを進めることになりました。当時、私がそれまで耳にしていた概略の知識に基づいて考えたことは、おそらくネパールは初期産業発展段階にあるだろう、その段階でいったいどのような人々が新しく輸入された西洋の技術を取り入れて資本財生産に生かしているか、ということでした。日本の例を念頭に置きますと、例えば江戸や明治の初期には、西洋からの技術を仕事の現場に取り入れていった職人として、大工や鍛冶屋がいたと思われます。おそらくネパールでも新しい技術の継承にあたっては、大工や鍛冶屋が大きな役割を占めているだろうと考えたわけです。そんなイメージを仮説としつつ、まず第一回目の現地調査に参りましたが、その調査でわかったことは、大工は新しい資本財生産にほとんど関心を持っていないということだったんです。ところが鍛冶屋は大きな関心を持っていました。それでこれはいったいなぜだろうということになってくるわけです。

カトマンズ盆地ではネワールの人々が、技術者・官僚・商人として大変な位置づけを占めています。ネワールの鍛冶屋は近代的な産業技術を大いに取り入れ、資本財生産をはじめていました。例えば西洋の技術援助で鉄工所のようなものが作られると、そこの現場で鉄をいじって仕事をしている人々は鍛冶屋の子弟なんです。その人達が技術を自分の家の鍛冶場へ持って帰って、新しい技術を導入し、機械を買い込み、資本財生産のための小さな町工場を作っていくんです。ところが大工はそういうことをしないんです。なぜしないのかというと、皆さん御存じのようにネパールではカーストが非常に重要な意味を持っていて、鉄をいじる人々というのは、ネワールの言葉でナカルミといいますが、比較的低いカーストなんです。アンタッチャブルではありませんが、中の下の階層です。したがって鉄をいじる仕事というのは他の

カーストの人から低くみられていますから、あまりやりたがらない。しかしどんどん入ってくる近代的技術は鉄を基盤にしていますから、ナカルミ以外の人々が入り込めない領域にネワールのナカルミ達がうまく入っていって、次々と新しいチャレンジをしていまして、このことが大変印象に残りました。このように、ある技術を取り入れる時にどういう社会階層の人々が担い手になるかというのは、各国特有の社会構造や価値に依存している事が大変興味深く観察されたわけです。この事に関連していろいろまだ話すべきことあるんですが、まずこの辺で取りあえず話を切っておきたいと思います。

真島：私は毎年古い民家を何棟か修理したり、活用して残したりするのが仕事なんですが、もちろん新しい建物も造っております。それでいつも家具屋に行って不思議だなと思うのは、ジュータン売場にかなりいろいろな柄のジュータンがいっぱい売られていることです。それがどこに敷かれるのかと思って調べてみると、和室の畳の上に敷くんですね。使っている人に理由を聞くと、毛布みたいで暖かくてゴロゴロできるとか、上品だとか、柄がいろいろあるからいろいろな個性のある部屋ができるとか、つまりは快適であるということだと思いますが、畳の上に敷くんですね。ではいつからこんなことが始まったんだろうかと考えてみると、どうも我々は畳だとか座敷だとかを和室と言っていながら、実は畳を使うことよりもカーペットを敷く方が昔からやっていた方法かもしれないと思いまして、では和室というのは畳が入っているけれども昔はどうやって使ったのか。いろいろな事が気になりましてあちらこちらに行って文化財の建物を引っくり返して見ていくと、明治の始め頃の畳は現在ほどの厚さはなくて、もっと薄いんです。そして畳を毎日敷いて使ったんじゃなくて、普段は床に棒を 2 本置いてその上に畳を積んでおく家が多かったんです。もちろん町家は別ですけれども、地方では要するに畳自体があまり毎日使われるものではなかった。何時使うかというと例えば宴会とか結婚式とかお葬式とか、いわゆる日常的な暮らしでない時に使っていたようなんです。では普段はどこを使っていたかというと、建物を見ていくとそれは板間なんです。板間があってそこに囲炉裏があって、その手前に土間があって、毎日使うところはどうも私共が現在住んでいるような畳敷きの和室というようなものではなくて、板の間と土間という場所ではなかったか。畳というのは先程申し上げたような使い方をしていて、ずいぶん冷たい所に居て冬はどうしていたんだろうと思ったら、どうも藁で編んだもの、猫編みといった大変固い編み方があって厚さはかなりになるんですけれども、そういったムシロやゴザのようなものを敷いて使っていたようです。明治まではこれが基本的な毎日の暮らしだった。どうもそれとカーペットとが近づいているような気がしまして、畳というのは畳床の大量生産ができるようになって、明治の終わり頃から大正、そして戦後に一気に普及するわけですね。日本的な伝統と思われている畳を日常的に使うようになったのは、ごく最近のことなんです。そうなると身体の中のカーペットを使いたがる気持ちとムシロとが、どうも近い関係にあるんじゃないか。どうも日本は新しい畳の使い方を今始めている時なんじゃないだろうかと思っています。そんな事が、モノが普及していく時に何か関係があるだろうという事に着目して、今日はお話できればいいと思っています。

南：南と申します。よろしくお願いします。私達は職人という日本語から、技とかカンとか伝統といった言葉を連想しまして、頑固で融通がきかない職人気質というイメージを持ちます。職人は名を馳せる工芸家となり、その時点で製品は作品に変化するという道筋があるようですが、いったいこういうことは普遍的なものなのでしょうか。あるいは職人文化とか近代化というものは根本的に相容れない性格のものなのかというような疑問もあります。例えばインドでは、日本的な意味での職人が国家や州政府の庇護のもとで製作活動を行なっておりまして、それは国家にとっては少数民族政策であったり、下位カーストに対する政治・経済的な政策の色あいが非常に強いものです。どうも職人から近代的な意味での工芸家への道筋というのは、篤志家とか行政による公認、あるいは庇護というものが契機の前提とされているようで、そういう再評価の上に立って初めて、職人から近代的な工芸家というものに入っていくのではないかと考えます。ネパールの場合は、政府が経済成長や開発至上主義を政策の中心にしていますので、職人の持つ潜在的な能力をすくい上げたり、工芸に向かわせる政策というものは、インドあるいは日本とは違って、今のところありません。

そこではむしろ職人カーストの人々自身が、主体的に近代化ないしグローバル化に対応しています。ものを作るという意味で産業化や近代化に最も近いところにいる職人の人達は、それゆえにかえって柔軟で可塑性の高い生計を選択しているのじゃないかと考えています。このような内発的な対応を職人文化の継承、あるいは継承というとどうしても我々は伝統的な技とか生活スタイルが近代化の中においても変わらないという側面をイメージしがちなので、もっと主体的に変化させているという面を含めて、再編成なり再編、職人文化が再編しているというふうにとらえられるのではないかと思います。ネパールの場合もこういった意味で職人達自らが主体的に変えている、再編している激動の時期にあるんですけれども、そこを私は次の 2 つの側面から見ていきたいと今のところ思っています。一つは社会経済的な対応で、もう一つは政治文化的な対応です。

一つめの社会経済的な対応は、例えば新しい素材、午前中に発表された香月節子さんのスライドに出てきたような鋼をとり入れるというようなこと、あるいは先程の新津先生のお話に出ました近代工業部門への進出というようなこと、それからネパールはことに観光が盛んな所なので土産物を作るという形で、新しい素材で新しいものを観光客用に作っていくというような職人のあり方等があるかと思います。一方で、今まであった伝統的な技術が変わらない、あるいはさらには近代化する中で逆に強化されていく部分もあります。それは、例えばスライドにも出てきたんですけど、結婚のお祝いに銅製の水入れを贈る習慣がありますが、これが最近経済的に豊かになりつつありまして、すたれるどころかかえって活発になっていて、水入れの生産が伸びている、あるいは生産地が増えているといったことがあります。それからそれにともなって特産地が生れてきて、どこの土地は何作りで有名だというようなものが出てきています。マーケットもそれによって変わってきているのが見られます。中にはさらにそれが特化していきまして、職人がネパール語でサフという言い方をする商店主に変わっていく、「職人

のサフ化」という現象も見られるようになっています。カトマンズのネワールの銅を主に扱うタムラカールというカーストの人達の中には、現代のサフは祖父の代までは職人で自ら銅器を作れたんだけれども、父の代あるいは自分の代ではもう作れない、もっぱら売り買いをする商店主になっているというような事例があります。

それから政治文化的な対応の中で一つ重要だと思う事は解放運動です。先程から出ていますように、ネパールの職人の多くは下層カーストで、不可触民とみなされています。現在彼らは近代という自由・平等思想の流れの中で、差別の解消と対等な人権の確立をめざす解放運動を始めています。それから一方で、これは橋さんの発表に出てきましたけれども、職人が持っていた技なり伝統といったものを、自らのアイデンティティーとしてとらえなおし、その回復運動を進めていくという側面があるのではないかと思います。このような事を今は考えています。

香月：香月です。よろしくお願いします。私が今日のタイトルの「アジアの金属職人文化」というテーマに沿う形で申し上げられることは、おそらくほんの一握りしかありません。ですから、大変端折った、またステロタイプな物言いになると思いますが、もう結論めいたことを先に申し上げておきますと、たぶん近代というのはある普遍性が社会を覆っていって定着していく動きであるとも言えると思うんですが、そうした近代化が進むにつれて、民間の習俗や価値観は、様々な形で追い詰められたり煮詰められたりしていくわけで、その中には煮詰められて消滅した伝承文化というものもあると思います。でも逆にそうした熱を吸収して、それまで隠されていた面も含めて、己れをより明確な形で主張するような、そうした伝承文化もあるように思います。日本の近代の鍛冶職人というのは、ある時期は正にその後者の方ではなかったんだろうか。そうするとそこで問題にすべきは古いものの消滅とか新しいものの吸収ということではなくて、変化そのものになります。つまりその時に過去というものがどんな形で時代に向き合っているのか、その様相そのものがテーマになるんではないかと思います。これは少し言い方を変えますと、新しいものの普及が、従来の技術のあり方の一面をより観察し易くしてくれるという点もあるのではないか、そうしたことが近代の日本の鍛冶職人については言えるのではないかと思います。金属に関わる職人といっても、私が多少なりとも知っているのは鍛冶職人のものですから、もうここで話自体を鍛冶職人に限らせていただきますけれども、おそらく日本の鍛冶職人は明治期の後半にそういった時代を迎えた事が、一つの世代経験として、あるいは時期として、あったのだろうと思っています。もう少し具体的に表現すれば、明治の半ば頃に弟子入りして明治後半に力をつけて独立した世代の鍛冶職人というのは、そういう立場に立っていたのではなかろうかと思います。農業技術史の上では、日本の様々な農具というのは、江戸時代の半ば以降には明確に地域差が現われ、確立されたということに一般的にはなっているようですが、だいたい江戸時代末期くらいになると、日本の民間社会に存在する鉄に関しての知恵と技は――これを鍛冶職人がある程度背負っているわけですが――かなりのレベルに達していたのではないかと思います。そのことが製品の質と量を通じて明確に見てとれ

るようになるのは、実は明治以降のことになるようです。明治後半以降の鍛造物を見て、遡って考えると、そういうふうに類推するのがいちばん自然じゃないかなと、技術者のそういう流れがひとつそこに出てくるように思います。明治 20 年代から日本の鍛冶職人の間に、輸入された俗に「洋鉄」、「洋鋼」といわれるものが普及していきます。そこでここではとりあえず、それまで日本の国内で作られていた鉄を「在来鉄」と呼んでおきます。「洋鉄」「洋鋼」をまとめて「洋鉄」と総称しますが、これはそれまでの在来鉄に比べて細工の手間がかからずにすみ、成分も均質で扱い易く供給もより安定していたと思います。その普及によって日本の鍛冶職人の生産量が非常に大きく伸びていきます。と申しましても、現実的にあまりピンと来ないという方もおられると思いますが、別の表現で申し上げますと、現在日本全国に約千何百の博物館や歴史民族資料館があるわけですが、そこに収集されている鉄製農具、クワ・カマ・ナタ・ノコ、全部集めておそらく 10 何万点という数になると思います。それを全部目の前に積み上げたとして、洋鉄でできているものがどのくらいあるかというと、私が今まで見聞した限りの推測で申し上げると、おそらく 85% 以上になるのではないかと思います。ですから皆さん方が博物館で、これが日本の伝統的農具であると言われて見学されているものの 85% 以上はこの 100 年間に作られたものです。そのくらい洋鉄の影響力というのは大きかったんです。ただ、これは一つ補足しておきますと、洋鉄は再生利用の頻度では在来鉄とは比べものになりませんから、一挙に日本人の生活の中の洋鉄の道具の割合が 1 対 9 に増えたということではないんです。こうした明治 20 年以降に作られた鉄の道具を通して、日本の鍛冶屋がどれほど細やかに道具を作り分けて、それをどれほど量産していったかを見ることができるわけです。在来鉄の鍛造技術と洋鉄の鍛造技術とは全く異なっていて、洋鉄を新たに使う場合には一から修業をやりなおさなくてはならないということはないんですね。手間がかからず、性質のバラつきもなく、供給も安定している洋鋼を利用することで、かえってそれまで在来の鉄では発揮できなかった鍛冶屋の力が発揮されていきます。つまり潜在的な技と力がそこで引き出されていったとみるのが自然だと思うんです。そして洋鋼という一つの普遍が全国の鍛冶職人に流通することで、鉄の道具を通じて逆に地域差がより明確な形で出てくるんですね。それから鉄の道具を通じて人間の意志というものがよりバリエーションを持って出てきます。製造物を通して鍛冶職人がここまで自己主張できた時代は、おそらくそれまでの日本の歴史の中にはなかったんじゃないかと思います。明治時代の後半といいますと、日本が近代工業をとにかく自前のものとしつつ、まさに工業国家として離陸し発展しようとしていた時期なんですけれども、そのことを前提として前近代的とみられるある種の生業は、日本の歴史の上で最も自己主張する時代をもった。その後それは下降していきますが、そうしたことの総体の意味をできれば他の国々、アジアの文化圏の中で考えていきたいというのが、今の私の問題意識です。

田村：どうもありがとうございました。それぞれ 4 人のパネラーの方々から問題提起ということでお話いただいたんですが、お聞きいただいてお分りのように、私のような怠け者ではとても司会の任に堪えられない、もう 4 人で勝手にやってくれという感じですが、幾つかの問題

が出ているかと思います。南さんの場合はネパールでの問題を手がかりとして、職人あるいは職人技術の近代化というものを大きく社会経済的な対応――変容と言いますか――と政治文化的な対応という 2 つの側面からとらえることができるのではないかと言われる。これは新津先生の問題意識ともかなり重なっていくものではないかと思うんです。香月さんは日本の鍛冶職人の変化、和鉄から洋鉄が相当入ってくることによって起こってくる変化といいますか、そういう点から問題がとらえられていたのではないかと思います。真島さんも、やはり難しい事を言われて困るんですけれども、敷き詰められた畳が板敷きになったり、カーペットがムシロであったりするというなら、これから先どうしていいか私にはわからないのですけれども、これは大変おもしろい問題だろうと思うんです。それぞれの方々の意見を補足するなり、戦わせるなりということで、討論していただきたいと思います。

新津：ではやりましょう。南さんのお話と香月さんのお話を大変興味深くうかがっておりました。特に香月さんにおうかがいいたします。洋鉄が入ってきた時点から鍛冶屋が自己主張する場が非常に出てくると言われました。また、同時に地域性も出てきたというようなことをおっしゃっておられました。私も例えばネパールのネワールの鍛冶屋、ナカルミの人達がどうだったかということをちょっと考えました。普通こういう特殊な人達が脱落してもっと低い賃労働、日雇い労働のようなところに行くということもありえると思うんですけれども、ネワールの鍛冶屋の場合には私はそういう例を見ておりません。農村、農業に帰っていくというのはありますが、それも少数です。ではどういうパターンが見られるかというと、一つは伝統維持型で、これまでの鍛冶屋の仕事を小規模ながらずっと続けていく。それから先程もちょっと御紹介しましたように、近代的な町工場等に勤めに行ったり、あるいは見様見真似でいろいろな技術を取り込んで、小規模な鉄工所のようなものを造っていく。いわば新しい技術にキャッチ・アップしながらうまく発展していく人々がいるわけです。もちろん大工場で働いて技術者として活躍していく人々もいる。これはサラリーマン鍛冶屋というような種類のケースだと思います。さらにもっと新しい活躍の場を見つけていく人達がいまして、それは例えばトリィブバン大学自動車工学の教授になっていく。これは資本蓄積をした鍛冶屋が、子供には良い教育を与えて、その結果こうした職業に従事するようになっていくわけです。自動車の運転手やバスの運転手も多かったです。やはり鉄ののりものを操作する仕事だからです。要するに鉄をいじる関連でこのような職業に進出して来るわけです。そこで香月さんにおうかがいしたいのは、そういういろいろな産業への進出という点では、日本ではどんなふうであったんだろうかという事なんですが、いかがですか?

香月：きちんとしたお答えにならないかもしれませんが、私が調査をしていろいろな話を聞いた鍛冶屋の古老というのは、もう完全に洋鋼が普及した時代のお年寄りなんですね。その時代に例えば鍛冶屋の親方に 10 人弟子入りをして、何人が鍛冶屋として独り立ちできるかというと、平均的に申し上げるのは大変難しいですし、腕だけじゃなく独立に際しての資本等いろいろな条件も関わってくるんですが、多くても歩留まりは、まあ 3 人くらいじゃないかと思い

ます。それでは在来鉄の時代はというと、もうこれはまた聞きのまた聞き、当事者からの聞き書きじゃなくて「うちのおやじが、あるいはじいさんがこう言っていた」という形になりますが、10 人に 1 人いるかいないか。つまり在来鉄をまず均質の板状の鉄に打ち延ばさなくてはならない、その段階の技術を身に付けられない人も多いわけです。洋鉄になると、まず鍛冶屋に弟子入りした人間の歩留まりが何培かにはなっているということが、一つの条件としてあると思います。それから私が聞き書きをした世代というのは、私自身は 1949 年生まれで 20 歳代の頃から古老に話を聞いていますが、だいたいその頃の古老というのはさっき申し上げましたが、明治後半に腕をふるった古老ではないんですね。もうそういう方はほとんど亡くなって、そういう人に弟子入りをした人がお爺さんになっていて、私にいろいろな話をしてくれるわけですが、これはある意味では上向きのベクトルの世代なんです。鍛冶屋としては、自分の親方の時代がものすごい力を発揮する。そうすると鉄製品の使い手も、鍛冶屋がここまでできるんだったらといって、もっとレベルの高いものを要求して、作り手もそれに見合うようにグレード・アップして自分の腕を上げていく、職人としてそういう上向きのベクトルが感じられる世代なんです。ですから話を聞いていても面白いんですが、もう一つ冷静に見ますと、日本の民間社会の鉄に関する技と知恵というのは、その時本当は鍛冶屋の所に集中していたんじゃなくて、もうかなり町工場の方に移行し始めていたんです。ですから話をずっと聞いていると、上昇している勢いと、何かこう勢いが下降しているようなトーンとが、立体的な立ち上がりを持って目の前に出てくる、そういうライフヒストリーの持ち主が私の出会った鍛冶職人の古老なんです。もちろん話を聞いている時はそんな事はわかりません。しばらく後になって、ああそうか、あのお爺さんというのはこういう時代を生きてきたんだなという事がわかったので、ここでもっともらしく能書きを言っているわけです。もう時代の要請というか、そういった知恵とか技が町工場に移ることで、日本の近代がもう一つ上に行ったというか、近代を支える力がより広がったというか、そういう時代なんです。ですから社会全体の知恵から言うと、私の会ったお年寄りの時代には、上昇の勢いと、ウェイトが他の所に移って行く流れと、両方があったわけです。それでどういうパターンで鍛冶屋として独り立ちしていくかというと、だいたい私が話をうかがった鍛冶屋の古老は 70～80 人ほどなんですが、新津先生へのお答え以前に、まず時代的に今まで述べたような前提があったということです。その後は日本の場合には鉄製農具がより分業化していますから、例えば厚刃物鍛冶だったらどういうふうに生きのびられるかとか、鋸鍛冶だったらどうか、野鍛冶だったらどう社会に対応していくかというふうに、何を打てるかによっても変わっていきます。私自身こういう道具の海外での調査は、ネパールと中国をやっとやり始めたばかりで、他の国はどうなんだろうかと逆に思っているところです。まったくお答えになっていませんけれども、いかにわからないかということだけをちょっと申し上げて、逃げたいと思います。

田村：今の香月さんのお話に関連して、どなたかありませんか？

新津：ではもう一点。南さんは、新しい素材が入ってくると変わって来る要素があるといわ

れました。技術文化の発展ということについても言及されました。私が取り上げた先程の大工と鍛冶屋の例を考えてみますと、伝統的社会の中では大工の持っていた技術文化がかなり高いということなんです。例えばhandloom、手織りの織物を作る機械ですけれども、それから木のロクロだとか、油絞り機とか、技術的センスが無ければできないような、かなり大きな道具もあります。ところがこのような木の素材文化から鉄の素材文化に変わる時に、前の素材文化を担った大工達は、それに関心が持てなくてキャッチ・アップできなかった。新しい鉄の文化というのは汚いものだという観念があったからです。その隙間をぬって鍛冶屋がどんどん入っていくという事になったわけです。そういうことで、素材というのは非常に重要な意味を持っていると私も思います。その辺の事についてもう少し南さんの御意見をおうかがいしたい。

それからこれはおそらく香月さんにも関わることですけれども、あるいは真島さんにも関わるかもしれません。素材というのは非常に大きな転換点をもたらすものだと思いますが、日本に新しい鉄の素材がヨーロッパから入ってきたことによって、鍛冶屋のやる仕事が増えたと言われましたけれども、おそらく素材と同時にマーケット・メカニズムというか、需要の問題が重要だと思います。鉄の農具が多く生産されても、買う人が同時に増えたのかという事が当然あるわけです。ですから素材とマーケットというのは非常に重要な問題だとおもうんですけれども、できればちょっとその辺の事をお話しいただきたいんですが。

田村：当面のターゲットは南さんなので、南さんまずどうぞ。

南：新しい素材という普遍性が逆に地域差や個別性を生む、あるいは自己主張を職人達にもたらしたという、香月先生の興味深い御指摘を聞きながら、ネパールの場合はどうなんだろうと考えていました。まだ我々は調査を始めたばかりで、農具や工具の地域別の作り分けや差異についての緻密な調査ができないものですから、日本的なセンスでの比較が困難です。しかし新しい素材の導入という点では、先程私がお話ししたのは鋼だったんですけれども、やはりステンレス、アルミニウム、プラスチックといったものの登場も忘れる事はできません。午前中の香月節子さんの台所を映したスライドの中にも、ステンレスのものが非常にたくさんありました。もう少しお金の無い家ですと、ステンレスのかわりにアルミニウムのものが増えています。伝統的に真鍮のものや銅のものの方が価値がありまして、上等なものという意識はあるんですけれども、それはどんどん変わってきています。そしてそれを扱う職人の方も、ステンレス等はさすがにどうしようもないんですけれども、アルミニウムの場合は、先程香月節子さんのお話で出たリサイクルという問題で、古くなって穴があいたりヒビが入ってしまったアルミニウムの食器を普段から集めておいて、ある程度集まると近くの鍛冶屋の所に持っていって、一度溶かして土で作った簡単な鋳型に入れて、それを叩いて器を作るという事をやっています。このシンポジウム会場の隣の部屋に、柄のついたアルミニウムの片手鍋が展示されていますけれども、あれなどは地方の一鍛冶屋が叩いて作り上げたもので、そういう新しい素材が地域の職人の技を生かし、彼らの仕事のバリエーションを増やしたという傾向があるのではないかと思います。

それから参入のパターンというお話が新津先生の方から出ていましたが、鉄という素材が不可触民のみが扱うものとして reservation、留保制度のような役割をはたして、他のカーストの人達が触りたがらないおかげで、こと鉄に関しては職人達の伝統が生きているという例はあるかと思います。それは新津先生がおっしゃったとおりです。しかしながらそれも徐々に変わりつつありまして、より大きな――マーケットという話も出ましたが――流れの中で、他のカーストの人も鉄等に触り始めて、伝統的なスタイルというのがだんだん変わりつつあるという事も、現時点では言えるだろうと考えています。

田村：では香月さん、どうでしょう。

香月：今御指摘された事はあえて触れずに逃げていたといいますか、もう私が言える事は一握りだからということで棚上げにしてきた事が 2 点、ひとつはこれは新津先生が御指摘された流通の問題ですね。日本の近代における鋼問屋の力というのは非常に大きいです。これは考えなければいけない問題なんです。私自身がそれについてはやっと最近手をのばし始めたところですので、ここでなにかお話できるところまでいっておりません。それからもう一つは、逆に使い手、買う方ですね、それだけ鍛冶屋が活躍できるほど注文があったということ。ではその注文をする経済力とか、農業に対する意識というのが、つまり逆に使い手の方にも変化があったんじゃないか。私は西日本での調査が多いんですけれども、たとえば四国の山の中に行って農家の農具小屋を見せてもらうと、草刈りガマが 20 丁くらい並んでいる家は珍しくないんです。しかし今からタイムスリップをして、150 年前の同じ家の納屋を覗いたらカマが何丁あったかと思うと、まあ 3 丁程度ではなかったでしょうか。明らかに農家の納屋の「近代化」というのはあったんです。鉄製農具の材質が全部洋鋼に変わったというのも農家の納屋の近代です。それからものが増えたということも近代です。ではどうしてそういう経済力をつけるに至ったのか。これは逆に言いますと、金属職人の世界からだけでは見えにくい部分というのが当然出てきます。今ここで申し上げられることとしてはこれぐらいで、私自身がまだあまり表現を煮詰めていなかったということで、これからの私自身の宿題としたいと思います。ただ、そうした変化の誘因について地域的には、たとえばこの地域にこういう換金作物が入ったからだといったことは指摘できます。また日本全体で考えると、藩という仕切が除かれて全国規模の流通機構が前提となったこと、それも人々が一つの広がりの意識、普遍的意識を持ったことに関係していると思います。しかし金属職人という足場でそれをどう表現するかということは、もう少し時間をいただきたいと思います。

田村：ちょっと真島さん、いかがですか。

真島：私はものを使っている人々や暮らしている人々の間に、どういう形でそのものがあるかという事に大変興味があるんです。先程畳の話をしたのもそうした理由からなんですけれども、実は民家をずっと調べていきますと、ああこの民家は明治何年頃だというのがいっぱい出てきます。江戸にさかのぼるものと、明治を境に明治年間に建てられたものとの量を比較していくと、どこへ行っても明治に作られた伝統的な町が圧倒的に多いんです。皆さんも御存じの

あの竹富島も、明治の中頃に赤瓦の風景が生まれたわけで、それまでは萱屋根の家が並んでいたわけです。そしていつも気になるのは、材木をどれ程使っているか、何年間くらい育てた材木を使っているかということです。そういう見方をしますと、建築の材料になるのは目のところで 30 cm、下へいきますと 40 cm くらいになりますが、そのくらいに育てばもう使えるんです。ですからだいたい杉の場合では 30 年から 45 年くらいで、日本の雨と雪とが育ててくれる材料というのは建材になるんです。その木を切っていきますので、民家の場合は大抵その周期に合った改築ブームが起こるという考え方をしていくといいと思うんです。そこで私は山を見て、この民家の大きさだとちょっと材料が足りないということになると、近くの山だけでなく全県下の山へ行って探します。そうすると、どうも明治期に大量の材木を建材に使えたのは、他で使わなくなったから使える時代になったからだと、最近は思い始めています。それも明治の終わり頃を境にです。というのは今千石船を設計しているんですが、そこで使っている材木は幅が目のところで約 45 cm 以上、長さが 30 m くらい要るんです。普通の建物の建材としては良いけれども、船材としては使えないという材料が山にはたくさんあります。ですから世の中では船山といって、杉を船材専門に育てるような山の植林をしてきたわけですが、大型の千石船を使わなくなったのでその山の木がいらなくなって、建材に転用していると思われる民家がいっぱい出てきます。皆さんは鉄の話をされていますが、要するにその頃大型の運搬船が、トン数でいきますと 100 トン積くらいですか、それ以上の重さのものは鉄の船に変わっていった。同時に和船は港が要らなかったんですが、今までの河口港では使えないということで、もっと深い港を造る為にコンクリートをたくさん使うようになった。こうして材木がどんどん船に使われなくなっていきます。日本では海辺の改造というのが近代化という格好で、鉄と一緒に出てくるイメージがあります。そこで豊富に出てくる鉄というのが日本の中で木と役割を変えたのは、海の部分が最初だったんじゃないかと思います。どうも私の見ている洋鉄というものは、そういうイメージで見えるんです。そして今の日本の山は、全部建材仕立てで山がてきていて、昔のような多様な木の育て方はもう無くなってしまったという印象を持っています。

田村：司会者としてではなく別の形で申し上げますが、先程新津先生がおっしゃっておられたことで、鍛冶屋はわりあい近代化というか、変化の波に乗っているとプラスの評価をなさいました。ところが大工はどうもそうでないんだということでしたが、後の話から言いますと、新津先生のおっしゃっている大工というのは木工職人ですね？ いわゆる家を建てる大工ではなくて。

新津：私の申し上げたかった事は、むしろ生産技術の担い手、あるいは資本財産業の担い手としての大工がどういう新しい仕事領域に進出していったかということです。今田村先生が言われたように木工職人として、あるいは家を建てることや家具の製造の方に進出して行きました。織物機械とか油絞り機とかロクロとかを生産していた当時もっていた、彼らのメカニカルな技術ノウハウを鉄に生かす事ができなかった。だから新しい資本財産業部門に参入ができな

かったという事を申し上げたわけです。

田村：先生のおっしゃっている大工というのは、要するに木を扱い、生産技術機器をつくる人ということですね。

新津：そうです。しかし御存じのように大工はシカルミという名前がありますが、あれはカースト名ではないので、シカルミといってもいろいろな人達が参入しているということがあります。ちょっとその点には複雑な部分もあります。

田村：木を扱う技術を持った人達にもかなりいろんな種類があって、一口では言えないだろうと思いますが、もう一つ皆さん方のお話の中で、素材が変わるというか新しいものが入って来る中で、代替できるものとできないものがあるのではないかという部分について、一つわからないんですけれども、木を使った器の類というのはかなりたくさんあったわけです。以前カトマンズのネワールの村の調査をした時に、もうほとんど使っていないんですが、物置をひっくり返すと木器の類がたくさん出てくるんですね。しかし現在ではもう使われていない。それが何に置き換わっているかというと、やはり金属器に置き換わっていくということがある。あるいは土器ですが、土器の場合はその後も使われています。どうも他に簡単に置き換わるものとそうでないものとがありそうな感じで、これは日本の場合も同じじゃないかという気がします。

新津：真島さん、代替の事ではカーペットなんかそうですね。

真島：何と言ったらいいか。カーペットではありませんが、伝統的な暮らしの形というふうに思っているものだけれども、どうも違うようだというものはもう一つあると思うんです。これもやはり使い方の問題の中で考えていることなんですが、家具の事なんです。明治の初め頃、または江戸時代に、各産地に車ダンスのようないろいろな種類のタンスがあります。それは薬を入れたり帳面を入れたりするものだったと思います。生活の中で使っている衣類は長持のようなものに入れていたと思います。けれども今見るとタンスという仕掛けがあって、押入とタンスというのが畳のように伝統的なものだと皆さんおっしゃっているけれども、あれはいつから出来たんだろうかと思うわけです。そうすると、それはやはり畳と同じように明治の初め頃、やや小さい小タンスというのから始まって、家具職人が地域に一緒に居て、非常に細工のうまい人がどんどん改良して、小タンスが合併して洋タンス、整理タンスというものを生んできて、結婚式の時には必ず花嫁 3 点セットを持っていくものだという錯覚が、どうもいつから生まれたのか知らないけれども、生まれている。伝統的な行事だなんて言っているけれども、要するにあれは家具屋の作戦ではなかったかというくらい、我々はお仕着せの伝統的な暮らし方をしているんじゃないかと思っているわけです。でも家の中を見ますと、やはり原型はどこかにあったものを明治時代にうまく転用して、そういうふうにしていったものだろうと思います。私共が伝統的という名前をつけてやっているものというのは、ほとんどが民間開発のものです。行政側が開発した方法というのは、素材産業としての鉄はあるかもしれないけれども、明治期には産業の近代化、そして戦後は生活の近代化というような事を言いながら、要するに近代化

と洋風化という言葉を上手に使って、行政がやってるものと民間がやってるものとがある。例えば川越の町造りなんか、防火造りだなんて江戸時代の云々と言っているんですけれども、あれは明治 36 年に出来た町並みです。ですから左官なんかのいろいろな伝統的な職人の非常に高度な技術が一気に普及したのは、明治時代だったろうと思います。それだけ日本の伝統的な技術の拡大と民間への普及に、その時代の道具が役立っていたのではないかというのが私の考えです。

田村：真島さんにかかってしまうと全部明治になってしまうんですけれども、私みたいな国粋主義者はもうちょっと古くてもいいんじゃないかなと思います。まあそれは置いておきまして、確かに明治という時代は、いわゆる私達が伝統的だと考えているものが一般化していった非常に大きな過程であるということは、香月さんのお話からも真島さんのお話からもわかるんですけれども、それで真島さんにちょっとお聞きしたいのは、では真島さんは香月さんが保留した問題をどのようにお考えなのかということです。経済力云々ということに限ってもいいですが、そんなに普及しているということは、家具屋がいくらペテンにかけようがどうしようが、かけられるだけの力が無いとかからないわけで、その点を考えますとやはりこの辺でちょっと香月さんでも真島さんでも、少し解決の糸口だけでも出しておいてもらわないと話が進まないのですが。

真島：それは田村先生が御専門じゃないですか。

田村：司会者にまわさないように。

香月：多少各論的なお答えになるんですが、近代という時代が始まって起こったいくつかの歴史的な出来事というものは、一見遠くにあるように見える事にまで影響を及ぼしているもので、先程真島さんから海に関わるいろいろの技術が鉄のあり方と密接な関わりをもっているのではないかという御指摘があって、ああそうだろうなと思ったんですが、時代的に鍛冶屋に関して言うと、北海道の開拓というのが大きかったんです。近代になって刃物産地として成立したところは、北海道に刃物を出すことでのしていきました。北海道開拓によって衰弱しかけた刃物産地が盛りかえしたことも、新しく産地が興きたこともある。そうなると北海道開拓がある程度終わっても、その蓄積や方向性のエネルギーは残るんです。これは逆に言いますと、時代を超えて生き延びた生業というものは、何らかの形でその時代性を吸収して、その分そこで変形しているということです。私の友達で東北のマタギを研究している田口洋美という若い人がいますけれども、日本の帝国主義がマタギの狩猟の形態を変えたんだということを彼はよく言います。かつてマタギというのは主にカモシカ、それと多少熊を捕っていたそうですが、明治時代の半ばから日本が植民地支配の為に大陸に出て行くようになると、大量の防寒具が必要となります。種々の防寒服もそうですがそれ以外に、例えば陸軍の将校のブーツの裏側はムジナとかカワウソの毛皮だそうですし、ゼロ戦のパイロットの飛行帽の裏側も――これは大陸進出の防寒具ではなく高い上空での防寒具ですが――小動物の毛皮です。そしてそれは何十万という需要があった。そこで軍とマタギとの間に毛皮商が介在して、小動物の捕獲が非常に安定

した稼ぎとして設定されると、マタギは小動物をたくさん捕るようになります。今日もマタギの人達は東北地方にいますけれども、こういう時代の要請にきちんと対応してきたということは、それぞれの時代において技術形態が変わってきたということなんです。昔からのものが変わらずにずっと続いてきたという方がむしろ珍しいわけで、ですから歴史年表の上では一見無関係な、一行の言葉であらわされている事の多方面への影響は非常に大きい。その一つ一つが及ぼした影響の全体やありかたは、おそらく「近代」という言葉でくくって、とりあえずここでは表現しているのですが。また問屋がある、ネットワークができる、鍛冶屋がそれを信用する、鉄がトラブルなく動く、それが農家の納屋をぬりかえていく、そういう広がりを支えるもの自体かなり近代的なものではないかと思います。そうすると近代というのは、別に明治になって始まったということではなくて、それ以前から準備されていたということになって、これはまた問題が別の方に行くというか、話の流れが他のところに行きますから、ここでは保留しておきたいのですが、けれども歴史年表では一見関係ないような一つ一つの事件が、意外と生産の場には大きな影響を及ぼして、伝統的な産業を長続きさせていくと同時にその形態を変えていく。また、形態を変えるに足る技術のレベルもそこにあったということです。非常に抽象的な言い方ですけど、とりあえずそれで答えとしたいと思います。

真島：建築の面ではですね、民家というのがいっぱい全国にあるんですけれども、民家の形まで変えた大きな産業というのは何だったかと聞かれれば、私は養蚕だろうと思います。それによって建物を建て替えることができるくらいの金が一軒の家計に入ったというのが、どうも明治の半ば頃を中心にした時期じゃないかと思うのです。建物をいっぱい建てたくなる時代というのは要するにどういう時代だったのか、私はそういう見方で日本の中の産業を見なおしていきたいと思っています。

田村：まとめていただいてありがとうございました。確かに養蚕というのは大きかったと思います。それからこれは香月さんにも真島さんにも聞くわけにはいかないし、他の方にというわけにもいかないんですが、当てずっぽうのところでこんな事が言えるのかしらというのが一つありまして、やはり江戸と明治の大きな違いというのは、米が年貢でなくなりますよね。年貢米というのは税金で、金銭にはならないですよね。そうすると地租に変わる事によって、米は喰ってしまったんではなくて、きっと売ったんだろうと思うんですが、その現金収入がかなり大きかったんじゃないか。それが基本的なところにあって、その上に養蚕が乗っかってくるんじゃないかと、漠然と思っているんです。そういう形では米というものを今まであまり気にしてこなかったんですが、養蚕だけではなくてもう一つそこに何かあるだろうという気は前からしていたんです。これは経済学の人に聞いてみないと私にもわかりません。いずれにしろ、香月さん、日本の場合には明治になりますともう鍛冶屋の製品というのは販売されますよね？物々交換ももちろん無かったわけではないでしょうけれども、多分に現金取引ですよね？

香月：そうですね。

田村：そうですよね。そこのところが日本とネパールという形で単純に比較するとかなり大

きく違ってくるような、どうも午前中のお話を聞いていてそう思うんですが、ネパールの場合金属職人は、鍛冶屋に限って言った場合、これから先どうなるんだろう、伝統的な鍛冶屋はどうなるんだろうという事については、何かありますか?

南：今の田村先生の話を受けてお話しますと、ネパールの鍛冶屋の場合は物々交換というわけではなくて、午前中の香月節子さんの報告にもありましたが、農民が自分の家の鍛冶屋というものを持っています。これをジャジマニー関係と言うんですが、一年間に一定量の米なりトウモロコシなりを鍛冶屋にあげて、刃物が壊れた時等はその鍛冶屋に修理してもらうという契約関係を結んでいます。農民のほとんどが自分の鍛冶屋を持っていまして、現金を払わずに穀物で仕事をしてもらいます。伝統的に仕立師ともそういう関係を結んでいました。またブラーマン、ヒンドゥー司祭とも、穀物を与えて一年に何回か、必要な儀礼の時に家に来てもらうという関係を結んでいました。しかし近代化していく中で仕立師に対するジャジマニー関係は見られなくなってきました。というのはバザールに行くと安い既製服がいくらでも手に入るようになったので、一年間に一定量の穀物をあげて自分の家の仕立師を置いておくのは割に合わなくなってきたからです。一方で金属製品に関しては、農具はすぐ壊れるし、先程香月節子さんのお話にありましたように、日本の刃物と違って刃先だけしか焼き入れをしていないネパールの農具は、しょっちゅう焼き入れをし直してもらわなくてはいけないこと、また農民はいつも必ず現金を持っているとは限らないので、ジャジマニー関係で自分の鍛冶屋を置いておく事は、農業をやっていくには欠かせないと考えている人が多いという面があるようです。

新津：ネパールの鍛冶屋は農機具工場と競合できるという、おもしろい事実があるんです。1969年からタライ平原の方ビルガンジーで、ソ連の援助のもとで、ネパールではけっこう大きな農機具工場が設立されました。始めは生産も販売も順調でしたが、4, 5年経ってみたら調子が悪くなってきた。そこのマネージャーが言うことには、「私達は村の鍛冶屋と競争しています。」というわけです。このソ連の援助で出来た農機具工場が生産している製品は、2, 3年は農村で使えるんですが、その後は使用不能になってしまう。クワやカマといった手農具というものは、使っているうちに刃こぼれをおこし、常にメンテナンスが必要です。しかし村の鍛冶屋にはこれが行なえない。したがって村の鍛冶屋が言うことには「旦那、これは悪い製品だよ。俺のとこで作っている方がよっぽどいいよ。」ということになる。こうして工場の製品を農民があまり買ってくれなくなるわけです。工場経営者は、どうしたらいいものかと言っていました。日本でもおそらくそういう問題があったのではないかと思いますがいかがでしょう。午前中の香月節子さんのお話にあった、日本の鉄のカマの場合はそういうことが無かったんでしょうか。近代化の過程で新しい鉄が入ってきて、それを鍛冶屋も扱っていたわけでしょうし、同時に工場もできているということでしたが、こういう問題は無かったんでしょうか。

香月節子：午前中はちょっと説明が足りなかったのですが、今新津先生がおっしゃったように日本のカマとネパールの農具を比べて申し上げたのではなくて、たまたま刃物一般を比べただけなんです。日本のクワの場合は鋼と鉄を合わせて作りますので、先ガケといって、きちん

と鋼を入れて継ぎ足していきます。毎年やるとは言いませんが。ですからクワ自体は同じクワを何代も使うことがあるんです。しかし刃物であるカマの場合は、先程申し上げたとおりに鋼と鉄を合わせて、あるいは中に挟み込んで作られていますから、構造的に鋼を包み込むようになっています。焼きおろして熱入れをきちんとしているものであれば、鋼が無くなるまで切れます。ですから鍛冶屋に持っていってもう一度焼き入れしてもらう必要は別に無いわけです。ネパールのクワも先ガケはやりますが、鋼と鉄を合わせて重ねるのではなく、先に継ぎ足して減った分を重ねていくわけで、方法が違います。私の説明が足りなくて新津先生が誤解しておられるようですので、ちょっと補足させていただきました。

新津：ではさらにお聞きしたいのは、ビルガンジーに「Agricultural Tool Industry」という工場があるんですが、この工場で製造した農機具は本当に村の鍛冶屋には修理できないんですか？

香月節子：私はそこまで調査に行っておりませんので、ちょっとわかりません。田村先生にお願いしたいと思います。

新津：それから、日本では鍛冶屋は消えていきますね。でも南さんが言われたように、ネパールではメンテナンスの仕事がある為に、農村部では今でも残っている。しかし都市部では急速に消えつつある。日本でも鍛冶屋はある所まで来た時に消えていく . . . 。

香月節子：いえ、消えていかないです。

新津：でも現在では非常に少ないでしょう？

香月節子：いえ、少なくないです。多いですよ。

新津：あるいは他に転換していくのかな。

香月節子：いえ、そのままですよ。

新津：農機具を扱う鍛冶屋ですよ。

香月節子：農機具といっても、いわゆる農業機械は工場が生産しますが、クワとかカマのレベルでは野鍛冶がそのままやっています。工場についてはわたくしはちょっと . . . 。

新津：つまり工場生産的になってくるのではないですか。私が若い時代にいた小田原郊外の小さな村みたいなところにも、やっぱり鍛冶屋がいましたよ。私の家の隣の隣くらいの所にね。それがやっぱりいつしかいなくなってしまった。新しいものに代替していく過程というのは、南さんが言われたように、どこかで既製服が出てきたりゴムゾウリができたり、あるいは大きな農業機械のような工場生産できるものが出てきて、生産量で職人が追いつかないということなんでしょう。農機具の場合はメンテナンスの必要があるから、職人がわりあい残っているんでしょうが、メンテナンスといっても、買って使い捨てにした方が安いということになったら、また別な展開をしていくんじゃないですか?　南さんと香月さんの両方に関わる問題だと思いますが、その点はどうでしょうか？

香月節子：今先生が言われたのは鍛鋼品じゃなく、きっと鋳物のことだと思います。鋳物の場合には、例えばスキの製作工場が農機具工場に変わっていくという傾向はあります。しかし

鍛鋼品を作る鍛冶屋の場合、農機具工場に変わったという例は知りません。鉄工所に変わるというのはもちろんありますが。

新津：鉄工所というのは、農機具工場のようなものですか？ 工場生産をするですか？

香月節子：うーん、それについては私は答えられません。

南：ネパールで農具を作っている村の鍛冶屋については、既製品の農機具が普遍的に使えるとは思えないんです。スキやクワの形にしても、どういう形の柄の部分にどういう刃をつけるのかによっても違います。鎌にしてもどんな太さの木まで切る地域なのか、斜面はどのくらいの傾斜があるのか等、地元の鍛冶屋ならではの知識で、その土地で使いやすい農具を作っています。ですから必ずしも町で買ってきた安い大量生産品が、鍛冶屋の製品にスッと代替されるということはありません。そして日本もそういう意味で、村の鍛冶屋が生き残っているのは、プロの人達にとって本当に使い易い道具は地元の鍛冶屋さんの作ったもので、そうでなければとても使えないということがあったからではないかと思います。

こういう実用面での職人の生き残りがある一方で、もう一つ必ずしも機能とは関係しない側面での生き残り方があると思います。例えば先程も出ましたが、ある程度経済的に裕福になったために水入れの生産が伸びていること。また別の例をあげれば、男性が亡くなるとお葬式の時に、その人が死後の世界で身につける指輪や、その人の奥さんも一緒についていくと考えるので、その奥さんが身につける装身具等を、新しく鍛冶師に作らせて、それを儀礼をしてくれたブラーマンにあげるという習慣があります。大抵の人は本物ではお金がかかるので、小さな指輪だとかブローチだとか、それから死後の世界で使う農機具等のミニチュアを作ってもらいます。このような習慣が裕福になってきたがゆえに、また活性化してきたようです。そういう意味では、職人たちの作る物や素材を増やしていくのはけっして実用面だけではなくて、非実用面においても支えられているわけで、もう一方では伝統的産業の残り方が、近代化の中で逆に生まれてきているのかもしれません。

田村：今の問題に補足させていただくと、非常に矮小化された形で言えば、ビルガンジーの工場で作っているクワ類というのは、あれはもともといかんのですよ。やはりもう少し考えないといかんのです。他の国のものをそのまま持ってきても、あのネパールの斜面の細かい畑で使えるわけがないんですよ。あれは中国型がソ連型のクワでしょう。そんなものを持って来て村の鍛冶屋と競合するなんていうのはいかんのです。もう一段階必要なんですよ。置き換わることは当然できると思いますが、ただそれにはもう少しキメの細かさが必要なんです。

新津：製品というのはどんどん置き換わる、代替していくという事と、しかし代替していく過程でその場所に定着可能な、適応可能なものと、不可能なものがあるようですね。

田村：あれは金の無駄遣いですよ。けれども香月さんが昔日本のカマの調査をやって、越前ガマの産地に行って、その頃もうかなり機械打ちのものが多くなっていましたが、それでも手打ちをやる人が 1 人 2 人いました。「あなたが打てるだけのカマを打って欲しい」と頼んだら、トラックいっぱあるよと言うんです。香月さんが帰ってきてどうしますかと言ってね。要する

に何百種類もあるわけです。もちろん草刈りガマだけじゃないんです。草刈りガマだけでも、越前で作っているものは何十種類もあるんですよ。越前三日月型とか越前青梅型とか、そういう地名の付いた名前のカマがいっぱいあるんです。それは越前ガマの技術で作っていても、青梅のあたりで使っている伝統的なカマのタイプを作っている。そうでないと武蔵野台地の青梅に持って行っても売れないからです。それでそんなにたくさんのものはやっぱりやめとこうと思って買うのをやめたんですけれども、その時に買っておいたら良かったと今になって残念に思っているんですが、度胸が無いものですから。こういうのはもうカマの産地ですと、バンショガマもそうですし、土佐ガマもそうなんです。そういう伝統的な道具には、やはり使う地域に応じたキメの細かさが必要とされます。洋鉄が入って来ることによって逆に地域性が出てくるという事を香月さんがおっしゃっていましたが、少しお聞きしたいですね。こういう細かい地域性をどう克服していくかということが、工場生産化していくかどうかの分かれ目になっていくんじゃないかと思います。特に伝統的なものになればなるほど。

真島：僕が伝統的な仕事というか、民家の復元なんかをやっていて困るのはですね、五寸釘とか、ちよっと柱が曲がっている釘、ママカシラといって柱がくるっと巻いている釘がある。それで打つと錆びて抜けなくなるんです。ところがそういう釘を作る技術はもう無くなってしまっている。だから作らせるのが大変なんです。一軒の民家でだいたい 5, 6 千本使います。ツツミ板というもので打っていくんですが、鍛冶屋に頼むと非常に高くなる。昔は安かったのにどうして今は高くなっているかというと、作り方がもうわからないから、一度に大量に注文が出ないからです。まあ民家の大小ありますけれど、6 軒くらいまとまると 5, 6 万本になってきますので、それだったら商売としてずっと打てるように改良を考えてもいい。要するに伝統的な技術を改良させるくらいの仕事のしかたをさせようと思った時には、ある時期それで飯が喰えるだけの仕事をどれくらい渡せるかということが重要ですね。ですから私なんか、ある程度の量がまとまってそれが毎年ずっと出ていくのでないと、釘を作らせられない。仕事をする時は、ある一定の技術が一定の時間継続するだけの仕事を発注できるかということが、やはり大切だと思います。それからどこまで人間がやって、どこまで動力化するかということも話の中に無いと、未来の仕事の形というのは読めないです。運動としてやっても、運動というのは継続できない。そういう問題も一緒に話に乗せていただくとありがたいです。

香月：今田村先生が言われた、カマの形が土地によって違うことは、これはいろいろな所で見聞したり、実際にその土地の鎌を使わせてもらったりするんですが、要するに使う側の白己主張が形になったといいますか。その土地が作りあげた形ですからそれだけでも文化的には尊重しなければいけないんですが、もう片方で、何をそこまで細部にこだわるんだろう、その感覚やこだわりを支えているものは何なんだろうかと思うんです。つまり少しでも能率を上げたいという勤勉さだけに収斂させていいんだろうかという気が必ずして、どこか割り切れないものがあるんです。物質文化が洗練されていくというとはどういう事なのか。これは一つの例えとして聞いていただきたいんですが、中国での調査での事例です。もっとも今こう言っていて

も、来年調査に行ったら結論が違っていたという可能性もありますから、前言を翻すために言っている部分があるかもしれないんですけれども。去年から中国の江西省の農村を覗かせてもらって、1 軒 1 軒の農家がどのくらい道具を持っているかをできる限りカウントしています。そうするとどの家にも必ず数多くとり揃えている、多いものになると 15 や 20 はある竹細工の容器が 3 種類か 4 種類あるんです。例えば高さ 70 cm 直径 50 cm ぐらいの竹のカゴがあって、僕はこれを持ってみて驚いたんですが、同じ大きさの日本の竹カゴの 3 倍くらい重いんですね。底は 3 重になっていて。このカゴの用途を細かく数えていくとおそらく 100 くらいはすぐにあげられるのじゃないかと思います。僕が滞在していた何日かの間だけでも 30 種類くらいの用途を目のあたりにしました。一見何の変哲もないカゴなんですが、これ 1 つあったら 100 くらいの用途で使える。そういう洗練の方法もあると思います。先程のカマの例なんかは、細やかさが形になっていくんです。だから洗練されればされるほど、多様な形が出てくる。物質文化が洗練されていくというのは、いくつかのあらわれかたがあると思うんですけれども、仮に中国の竹細工を取り上げてみると、現在の日本の竹細工には 1 つのカゴで用途が 100 あるというのはまず無いと思います。日本の農家で例えると、100 の用途を考えなければいけないというと、たとえば 20 種類くらいの用途可能な道具を 5 種類揃えるというふうになるんじゃないかと、中国の農家を見せてもらいながらずっと思っていました。そこに新しいポリとか合成樹脂の容器が入ったとしても、そのポリ容器一種類でもってその高さ 70 cm 直径 50 cm ぐらいの竹カゴにおきかわるような道具はないだろうと思います。竹の持つ弾力性、通気性、頑丈さ、多目的に沿う形状といったもの全部がそのカゴの中にメリットとして入っているわけですから。20 の用途を持った 5 種類のカゴを使うなら、その内の 1 つか 2 つは新しい道具が入ってきやすいような気がします。特に民具を調査しておりますと、西日本の場合形が洗練されていくと、5 種類ある仕事に 5 種類の道具を考えるのではないか。東日本の場合は 5 種類の仕事にまあ 3 種類ぐらいの道具を作って、あとは使い方のバリエーショシで勝負するというような、漠然とした印象を私は持っています。物質文化が洗練されていく時に、細やかさがどんどん形になって多様化してていく場合、これは部分的に他との置き換えがより可能になっていく柔軟性、悪く言えば脆さを持っているように思います。たださっき申しましたように、まだたかだか 2 年江西省の農村を覗かせてもらって歩いただけですから、これは中国と日本の比較ではなくて、物が洗練されていく方向のあくまで 2 つの例えとして考えていただきたければと思います。どう洗練されていくかという問題と、それがどう置き換えられていくかという事は、密接に繋がっているような気がします。

田村：先程もカマの事を言ったんですが、多様な地域性があって、それに対応できるような道具を打ち分けていく事で産地は形成されていくんですが、たぶんある地域のカマ、青梅なら青梅のカマを使うというのは、一つの慣れだとおもうんです。もちろんもう少し突っ込んで言うと、基本的にはその土地との関係が微妙にあると思うんですねが、しかしそういうものを克服していく事ができる農具というのが、ひょっとしてあるかもしれない。香月さんが最初に、

近代とは普遍化していくことだとおっしゃっていましたが、交換可能なものを作っていけるだけの技術はあると思います。だがそこに行くまでにはやはりある種の慣習的なもの、伝統的なものを、形の上でも使い方の上でも一度は踏襲していかないと、飛躍できないのじゃないか。飛躍できるものとできないものがあるだろうという気は、前からしています。

新津：その辺は非常におもしろいところだと思います。香月さんが言われたように洗練され、多様化され、そして細やかさの中にもしかしたら、文化のある種の頂点を迎えるのかもしれませんね。そして頂点を迎えるとそれがずっと維持されていくという様に解釈できます。少し飛びますけれども、おそらく日本の茶の湯だとか生け花なんかのある種の流派もそういう感じがしますし、西洋の建築様式でもそのような事があるだろうとおもわれますし、田村先生が言われたように、あるいは洗練されたそのまた向こう側に何かの飛躍があるのかもしれないし、また洗練される前に代替されてしまう事もあるでしょう。物質文化の持っている多様な展開過程、あるいは洗練されたものとそうでないものとの並存というのは、これから研究していくとおもしろいのではないかと思います。

田村：話がだんだんおもしろくなりそうなところに来ましたけれども、この辺でそろそろ休憩を取りたいと思います。だいぶニコチンが切れてきました。